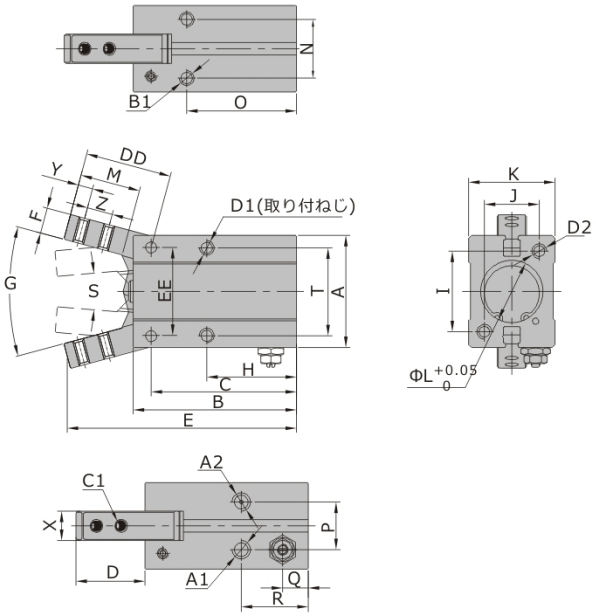
外形寸法図



内径/記号	A	A1、A2	B	B1	C	C1	D	DD
6	20	M3×0.5	36	–	32	M2×0.4	11.9	16
10	23	M3×0.5	38.6	M3×0.5深6	35.8	M2.5×0.45	14.3	17.2
16	30.6	M5×0.8	44.6	M4×0.7深8	39.7	M3×0.5	18.8	23.6
20	42	M5×0.8	55.2	M5×0.8深10	49.7	M4×0.7	23.5	29
25	52	M5×0.8	60.4	M6×1.0深10	54.8	M5×0.8	32.8	38.5
32	60	M5×0.8	68	M6×1.0深10	58	M6×1.0	29.7	40

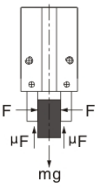
内径/記号	D1	D2	E	EE	F	G	H	I	J	K	L
6	M3×0.5	–	47.5	14	4	30°	26	–	–	10	7
10	M3×0.5深5	M3×0.5深6	52.4	14	4	30°	23	18	12	16.4	11
16	M4×0.7深8	M4×0.7深8	62.6	24	7	30°	24.5	22	15	23.6	17
20	M5×0.8深10	M5×0.8深10	77.7	30	8	30°	29	32	18	27.6	21
25	M6×1.0深12	M6×1.0深12	92	36	10	30°	30	40	22	33.6	26
32	M6×1.0深16	M6×1.0深12	96.5	42	10	30°	37.5	46	26	40	34

内径/記号	M	N	O	P	Q	R	S	T	X	Y	Z
6	11	–	–	1.6	7	19	10°	12	4	2.5	5
10	12	11.4	27	10.2	6.5	18.8	10°	16	6.4	3	5.7
16	16	16	30	13	7	18.3	10°	24	8	4	7
20	20	18.6	35	15	7.5	22.2	10°	30	10	5.2	9
25	27	22	36.5	20	7.7	23.5	10°	36	12	8	12
32	27	26	30	24	9.2	31	10°	44	18	6	14

把持力と把持点の確認

1、実効把持力確認

以下の方法で把持力の大きさを決めてください。



以上のようにワーク挟み、普通のワーク運搬時に出てきた大きな衝撃状況で、安全係数 a ＝ 4 をとして、把持力は挟まれたワーク重量の10～20倍以上になります。

μ =0.2時	μ =0.1時
$F=\frac{mg}{2\times0.2}\times4$ =10×mg	$F=\frac{mg}{2\times0.1}\times4$ =20×mg
挟まれたワーク重量の10倍	挟まれたワーク重量の20倍

左図のようにワークを把持する時：

F：把持力（N）

μ：付属品はワークとの摩擦係数

m：ワークの質量

g：重力加速度（=9.8m/s²）

ワークが落下しない条件は、つまり：

2×μF>mg

$F>\frac{mg}{2\times\mu}$

安全係数はaとして、Fは：

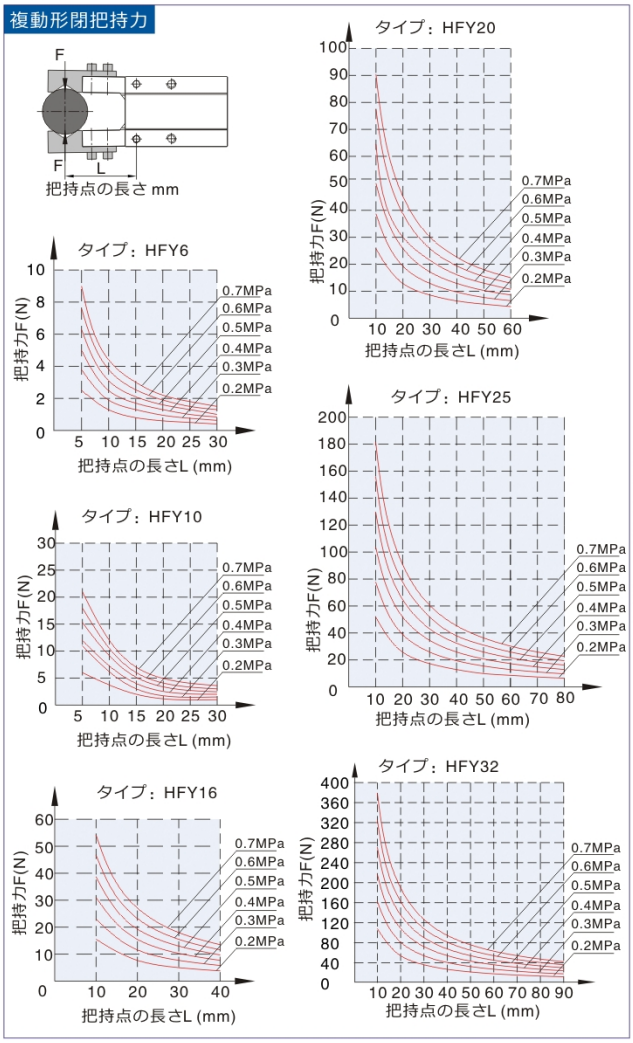
$F=\frac{mg}{2\times\mu}\times a$

注：摩擦係数μ>0.2場合も、安全の為、ワーク重量の10～20倍以上で把持力を選定してください。

2、把持点位置の選定

把持力の確認の後、下表の制限範囲の要求で把持点を選んでください。把持点を制限範囲外にすると、フィンがとエアハンドの寿命に悪影響を及ぼします。

複動形閉把持力



HFY